

崇る御衣木と造仏事業

なぜ霊木が仏像の御衣木に使われたのか

山本陽子*

序 神木を御衣木とした神仏の像

奈良時代末から平安時代初期にかけては、多くの一木彫の仏像や神像が造られた。それらの用材すなわち御衣木として、神木が充てられたと思しき事例が存在することが指摘されて久しい。

一本の木から神仏の像を造る場合、通常は木芯が朽ちてウロとなった木や節のある木を避け、仮にそのような木材を使うにしても、ウロや節の箇所を除けて木取りをする。しかし、ウロのある部分を中心に含んだまま造られた像⁽¹⁾や、節の多い木が使われた像⁽²⁾、曲がった木が用いられたために中心線の曲がった像⁽³⁾などの存在が、しばしば報告されている。なぜ礼拝対象となる像の御衣木に、ことさらこのような造仏には適さない木が選ばれたのか。

この疑問に対し『神像彫刻の研究』において岡直己は、神像の素材に主として木が用いられたことを、神が木に憑いて顕現したという伝承の多いことと、木の信仰という視点から解釈する。また、神木が仏像の御衣木として使われた例として『広隆寺来由記』の檀仏薬師像伝来記を紹介する⁽⁴⁾。すなわち向日明神の神木で枯株となっても時々放光していた木が、須臾の間に仏像に造られ、向日明神の権化として崇信された、それが広隆寺に伝わる檀仏薬師像であるという由来である⁽⁵⁾。

これを受けて、特異な御衣木の作例を素木の仏像において「霊木化現仏」として追求したのが、井上正⁽⁶⁾である。まず『日本書紀』推古二十六年（六一八）条の造船の用材を伐るに当たったの「霹靂の木なり。伐るべからず」という落雷を受け神の掬り代となった木を伐ることを咎める発言を挙げ、古来から霊木信仰が存在したことを立証する。

そして、精巧な彫りにもかかわらず彩色や金箔を施さない仏像については、最高の用材である白檀の彫像の素木仕上げに倣ったものと解する一方で、素木仏の中には粗雑に見えるような、ウロや節の多い木や歪んだ木で造られた像、一見稚拙な造りの、中心線からはずれた彫りの像や、人体の比率に基づかない像、背面の仕上げをしないままの像、鑿跡を残したいわゆる鈍彫り像などが多く存在することを指摘する。

さらに、岡が挙げた『広隆寺来由記』の、神木で作られた向日明神の権化の檀仏薬師像が、仏教系の姿をしていることに注目し、彫刻するには不適な材で造られた仏像を、同様に本来は神木が使われ神の権化として造られたものと考ええる。

その上で、神の依り代であった神木が、神に代わって仏が出現する霊木として造形されたのが、一連の未熟で粗雑に見える素木の仏像であるとして、これを「霊木化現仏」と呼ぶ。従来、造像の途中で放置された

か、民間の製作とされてきたこれらの仏像の、未完成で未熟に見える造形にこそ、意味があるという。霊木に宿った仏が徐々にその姿を現し、やがて形を失ってもとの古木に戻るといふ概念の一場面を、誰の目にも見えるように霊木に刻み付けて永遠化した表現と見るのである。木から姿を現した瞬間の立木仏、鑿跡を残した仕上げの鉦彫り像、目や耳、螺髪、宝髻などを彫らないままの像。金箔や彩色を施さない素木像のそれぞれが、霊木から仏が姿を見せる途中の各段階と解釈される。

この井上の「霊木化現仏」説には、「霊木から仏像を彫り出すことと霊木から仏が化現しつつある状態を表すこととは意識の違いがあるように思われただちに認めることはむずかし」といふ見解⁽⁷⁾もあり、年代論や行基伝説との関連などに未決着の部分もある。しかし少なくとも神像や仏像のうちに神木から造られたものが含まれている可能性については、受容され、裏付けられつつある⁽⁸⁾。

一 神木に刃を入れる行為

しかしここで気になるのは、神木に刃物を入れるという行為である。神の依り代、あるいは神そのものとされてきた木を、斧や鑿などを入れて倒すことへの、恐怖や抵抗感はなかったのだろうか。

先の『日本書紀』推古二十六年条の霹靂木の伐採の勅令に対しても、「伐るべからず」と咎める意見が記されていた。霊木は結局伐られたものの、それは伐採に際しての十回余の落雷にも怯まず、ついに雷神を捕らえて焚いてしまったような河辺臣あってこそである(註6参照)。

社地の木を伐ったゆえの祟りについては、すでに瀬田勝哉(註14参照)や寺川眞知夫が多くの記事を挙げて指摘している⁽⁹⁾。すなわち齊明七

年(六六一)、浅倉社の木を伐って宮殿を造ったため神が怒って建物を壊し、鬼火が出て多くの者が病死した⁽¹⁰⁾。百済大寺建立にあたって、子部神社の木を切ったため神が怒って塔に落雷、炎上させた⁽¹¹⁾。宝龜三年(七七二)、西大寺の塔建立のため小野神社の神木を切ったため塔が震った⁽¹²⁾。天長九年(八二七)、東寺の塔建立のため稻荷山の木を伐ったため淳和天皇が病氣となった⁽¹³⁾などである。

もともと神社の木は、伐採はおろか自然に枯れることさえも、神の怒りの顕れとして畏れられている。さきの『広隆寺来由記』においても、同寺の木枯明神は、乙訓郡の向日明神の社から檀仏薬師を広隆寺に移した時、向日明神が寺内の槻木に垂迹して俄に枯れたため作られたという(註4参照)。また中世には、春日山の木々が枯れることを春日明神の怒りとして恐れ、神を宥めるために藤原氏の長者や足利將軍が費用を出して御神樂を整えることが行われている⁽¹⁴⁾。社地の木を伐ること、枯れることはこれほどの恐怖を伴う⁽¹⁵⁾。

それにもかかわらず、ことさら神木が神像のみならず異宗教の礼拝像である仏像の御衣木に充てられたのは、なぜなのか。必ずしも用材として適切だったゆえでないことは、各像のウロや節の多さや歪みから明らかである。動機は逆ではないか。むしろそれが祟る霊木であったゆえに、祀り鎮める手段として、御衣木にされ造像されたのではないか。

二 祟る御衣木の伝説

その御衣木がかつて祟りをなす木であったという伝説で知られているのは、長谷寺十一面観音像である。現存する縁起では最も古いとされる『三宝絵』の記事では、大水で流出した御衣木が、まず近江国高島郡三

尾が崎に流れ着いたところ、

さとの人そのはしを切り取れり。すなはちその家やけぬ。またその家よりはじめて村里に死ぬる者おほかり。家々祟りをうらなはするにこの木のなす所なりといへり。

とある。そこで奥健夫は、もともとこの霊木が、人に幸をもたらすものではなく、災いをもたらす「疫木」であったと指摘する⁽¹⁸⁾。また寺川眞知夫（註9参照）は、観音像の御衣木縁起に祟りという「仏教思想にはなじまないように見える」事象が記されていることの異様さに注目する。

御衣木が祟ったという伝承は、谷原博信が指摘する『志度寺縁起』も同様である。『志度寺縁起』の御衣木縁起は、伝菅公筆の『長谷寺縁起文』を転用して書かれたと考えられるものであり、同じく志度寺の御衣木も人間に災いをもたらす存在であったとされる。

谷原はまた、『阿婆縛抄』⁽²¹⁾の河内国剛林寺千手観音像の御衣木縁起を並挙する。この「近江国栗本郡一夜内十丈成長の霊木」は、その木の影が及ぶところに疫病が流行したため、三つに切つて琵琶湖に流すと、漂着先で疫病が流行するため、それぞれを仏像として彫つたものが、近江国志賀寺の聖観音と長谷寺十一面観音、剛林寺の千手観音という。これも漂着して祟りをなす霊木という点で等しく、長谷寺の観音と同木とあるので、この御衣木縁起も長谷寺縁起からの影響に基づくものと考えられる。

神木が祟りをなす疫木であり、造像の主目的が仏像の作成ではなく霊木の処分、すなわち魔性の木を仏として祀り上げてしまふ祟り鎮めであったとすれば、御衣木に霊木を用いることの解釈は全く違つてしまふ。

もっとも長谷寺と志度寺縁起の内容は共通し、剛林寺縁起では長谷寺の観音と同木という縁が強調される。御衣木が祟る木であったという由

来は、この一連の長谷寺縁起の影響を受けた仏像に限られる特異な伝承だろうか。ここでは他の寺の仏像の御衣木について、あらためてその縁起から考察したい。

三 御衣木の巨木伝説

まず寺院縁起の中で我々が奇瑞と認識していた御衣木の霊異を再読したい。これらは当時の感覚の下では、むしろ怪異現象ではなかったか。例えば先の剛林寺の御衣木伝説の一夜内に十丈成長する巨木は、現在の我々には素晴らしいことのように思えるが、当時は必ずしもそう受け取られていない。『今昔物語』卷三十一「近江国栗本郡大杵語第三十七」⁽²²⁾は、剛林寺の御衣木と同じ近江国栗本郡の杵の大木を、陰になるので日が当たらず作物が育たないと、天皇に訴えて切り倒した話である。異常に大きい木は、それだけで怪異とされるのである。

巨木はまた、魔物の変化として語られる類のものであった。『今昔物語』卷二十七「狐変大楯木被射殺語第三十七」⁽²³⁾は、根元の大きさが家二間程、高さ二十丈程の杉の巨木が立っているため、怪しんで矢を射立てると、正体は杉の枝を銜えた狐であったという話である。

濱中修によれば、室町時代の『伊吹童子物語』⁽²⁴⁾でも、比叡山を住処としていた伊吹童子は、延暦寺開創にあたって、

この山に仏法をひろめ給はば、われこの山に住むことかなふまじ。いかにもして障礙をなさばやと思ひつつ、そのたけ三十余丈の杉の木となりて大比叡の嶽にぞ出生し

と、大木となって最澄に刃向かう。そこで濱中は、仏法との対比の中で地主神の姿を巨木に見る。

これらの説話から類推すると、一夜のうちに十丈成長するという剛林寺の御衣木は、長谷寺縁起の影響とは別の面においても怪異をなす木という性格を持っていたと考えられる。このような一夜成長の伝承は、剛林寺の御衣木のみに限るものではない。『阿婆縛抄』には革堂と善峯寺の千手観音の御衣木についても同様の伝承がある。⁽²⁵⁾この木はかつて苗が一夜にして成長した賀茂中社の神木であり、その倒木を革聖行円が貰い受けてこれらの寺の千手観音像になしたという。これらの御衣木の一夜成長も、一種の怪奇現象と捉え得る。

四 御衣木の放光伝説

また、御衣木の縁起には多く、霊木が放つ光の記述が伴う。先の長谷寺縁起や、それから転用された志度寺縁起の流出する前の御衣木も、近江国高島郡三尾前山白蓮華谷に横たわる臥木で、「此木放瑞光薫異香」と光を放ち、香りがしたと記されている。

光る御衣木の縁起はこれ以外にも数多く、最も古いものとして、比蘇寺の放光仏の御衣木の記事がある。『日本書紀』欽明天皇の十四年（五五三）、和泉国の茅渟の海に梵音がして響きは雷音の如く、麗しく照り輝くこと日の光の如しという報告があった。怪しんだ天皇が池辺直に調べさせ、楠木が海上で照り輝いているのでこれを取った。天皇はこの木で仏像二体を造って吉野の比蘇寺に置いた、それが放光仏だという。夜、音や香りを立てて光るもの、これは怪奇現象に他ならない。

たしかに仏教では釈迦の身体的特徴を挙げた三十二相の中に、丈光相という釈迦の周囲一丈は常に光り輝いていたという記述と、それを視覚化した光背があり、光り輝くことは素晴らしいという感覚がある。高僧

伝や霊像の奇瑞にも、重要な場面で身から光を放つという物語は稀ではなく、⁽²⁷⁾先の比蘇寺の放光仏もそうした伝承を伴っている。

しかし仏教を離れた民間説話において、夜光る物ほどのように扱われているのか。『今昔物語』「西京人見応天門上光物語第三十三」⁽²⁸⁾では、母の危篤に夜中に命懸けで弟の僧侶を呼びに行った兄の侍が、応天門の上に「真サオニ光ル物」が鼠鳴きをしてカカと笑うのを見る。頭の毛太り死ぬ心地ながら「狐ニコソハ有ラメ」と思い念じて過ぎると、豊樂院の北の野に「円ナル物ノ光ル有ケリ」。それを矢で射ると消えたが、帰った男は発熱して寝込んでしまったとある。

おなじく「有光来死人傍野猪被殺語第三十五」⁽²⁹⁾は死んだ親を棺に入れて置いておいたところ、夜半になると光るといふ。「此レハ若シ死人ノ物ナドニ成リテ光ルニヤ有ラム。亦死人ノ所ニ物ノ来ルニヤ有ラム」と兄弟で見張っていると、天井から降り来る「真サオニ光リタ」る者がある。抱き着いて刀を突き立てると巨大な年老いた猪であったという。

前の話の主人公は光物の正体を狐と思ひ込もうとし、後の話で『今昔物語』の語り手は、猪と判って安心したが「其ノ前ハ只鬼トコソ可思ケレ」と評する。恐れているのは死人が物、則ち悪霊や鬼になって光ること、或いは死人に鬼が光物となって来ることである。光物を死人の魂と見て恐れる発想は物語の中だけではなく、当時の記録にも『中右記』嘉保二年（一〇九五）十月に「二日夜、禁中北中門方、大光物有り。コレ人魂ノ疑ヒ有リ」と書かれている。⁽³⁰⁾⁽³¹⁾

縁起の中で仏像の御衣木が、かつて光を放っていたという説話は比蘇寺の放光仏以外にも、数多く存在する。太秦の広隆寺の檀仏薬師像の御衣木も『広隆寺由来由記』によれば「時々放光す」るものであったといい、『尾張国笠寺縁起』の小松寺の御衣木も、同じく海に浮かんで「その木

より光さしよりよりてりかがやく」霊木であった。『溪嵐拾葉集』第七「根本中堂不思議事」によれば、最澄自刻の伝承を持つ比叡山の根本中堂の薬師如来像の御衣木も、「晝ハ紫雲ヲ覆、夜ハ光明ヲ放」つ霊木と語られる⁽³³⁾⁽³⁴⁾。

これらの縁起における御衣木の、一夜成長の巨木という伝説や、放光する木という伝承は、当初の民間伝承から見れば、必ずしも素晴らしく尊い物としての記述とはいえない。『長谷寺縁起』系統の御衣木と同様に、これらの形容は、霊木といっても負の性格を持つもの、怪奇現象や祟りにより恐れられる疫木を意味したのではないか。

五 祟り鎮めとしての造仏

井上正は、神木を用いたと思しき仏像の一群に、未熟あるいは未完成に見える作例のある理由を、山林修行僧が祈りの中で霊木に出現した仏の姿を感得し、その過程を霊木に表現した「霊木化現仏」であるゆえと解した。しかし用材となった霊木や神木のうちに、人に崇められるもののみでなく、怪異や祟りをなし、恐れられたものが含まれているとなれば、それを御衣木とした場合の造像目的の解釈は、井上説とは異なって来ざるを得ない。

悪性の霊木で神仏の像を刻むことの意味は何か。長谷寺十一面観音像の御衣木について、奥健夫は「崇る神の宿る木を用いて造像することによってその祟りが鎮められ、同時にその呪力が像のうちに取り込まれた」と考える(註18参照)。谷原博信も志度寺の御衣木縁起を、「仏像に刻むことによってその霊木をまつりあげ」、「その負の威力を正の働きとして人間の側に引き寄せようとする発想」と解釈する(註19参照)。

崇る御衣木と造仏事業

山本陽子

御衣木の祟りを記した『長谷寺縁起』について、寺川眞知夫はさらに「霊木は意志をもち、仏教的な願を持つても人の手を借りないでは願望を成就できず、願を叶えるよう祟の啓示によって促している」という発想に基づくと解し、神が神身を逃れるために仏教的営みを求める啓示を下す、若狭神願寺の神身離脱願望伝承との共通性を見る(註9参照)。

若狭神願寺と同じく、神身離脱を願う神の縁起として知られているのが『多度神宮寺資材帳』⁽³⁵⁾である。ここで神身を離れ仏教への帰依を願う多度神の神託への対策は、神像を造り多度大菩薩と号して祀ることであった。そのような菩薩号を持つ神像の形を岡直己(註4参照)は、地藏菩薩の如き僧形、或いは広隆寺檀仏薬師菩薩のような天部形か、観音のような菩薩形と想像する。

仏の姿の像を造り、仏として祀ることが祟りを鎮める手段となる、これは神身離脱願望伝承を持つ神宮寺と長谷寺や志度寺以外にも、御衣木の祟り説話の痕跡を持つ縁起に当てはまる発想ではないか。土着の神を仏教に帰依させるという意味では、若狭比古神や多度神も、造像を以て霊木の精の祟りを鎮めることも等しい。

霊木の精が仏道に入り祟りが鎮まったことを、目に見える形に表したのが、木に刃を入れて仏教に帰依した姿に変える、つまり木を彫って像となすことである。その形は恐らくは多度神と同様の僧形か天部形か菩薩形であろう。その結果として神木から仏の姿に造形されてしまった結果がこれらの像ではないだろうか。

六 霊木伐採と祟り

霊木に斧を入れること、鑿で仏の姿に彫ることは、祟り鎮め、樹木の

精の調伏を意味するのである。土着の神の木が、異教の僧侶や仏師に刃を入れられることを、易々と受容したとは限らない。むしろ抵抗したと想像する方が自然ではないか。そこでまず祟る木の説話として知られる『今昔物語』巻十一「推古天皇造本元興寺語第二十二」³⁶⁾の槻木の伐採場面を見たい。

堂ヲ可起所ニ、当ニ生ケム世モ不知古キ大ナル槻有リ。「疾ク切リ除ケテ堂ノ壇ヲ可築シ」ト宣旨有テ（中略）亦、他ノ人ヲ以テ令伐ルニ、始モ斧金番ヲ二三度許打立ル程ニ死シカバ、亦此ノ度惶々寄テ令伐ル程ニ、亦、前ノ如ク俄ニ死ヌ。具ノ者共、皆此ヲ見テ斧金番ヲ投ゲ棄テ、身ノ成ラム様モ不知ヲ逃テ去ヌ。其後ハ「如何ナル勘当有リト云トモ、今ハ更ニ木ノ辺ニ可寄ベキニ非ズ。命ノ有ラバコソ公ニモ仕ラメ」ト云キ。惶ヲ迷フ事無限シ。

結局は或る僧が木の中で話す「麻苧ノ注連ヲ引廻ラシテ、中臣祭ヲ詠テ、杣立ノ人ヲ以テ繩墨ヲ懸テ伐」らせれば祟れないという声を聞き、それを実行して伐採する。御衣木でこそないが、霊木を伐ることが如何に恐れられていたか、伐るための儀礼が如何に重視されていたかが判る。

伐採に際して霊木が祟った痕跡を残している説話が、明応四年（一四九五）奥書のフリア美術館蔵『槻峰寺建立修行縁起絵巻』³⁷⁾である。常に放光している大きな槻木を伐るにあたって、日羅は龍猛が南天鉄塔を開いたときの故事に倣い、十七日の間、斧を加持し木の周りを巡ったのち、浦人にこの斧を渡して木を伐ることを命じる。木が倒れた瞬間、木の上の生身の千手観音立像が忽然として出現する。

しかし、木を伐った浦人たちは、絶え入ってしまう。上人が立寄って之を加持すると、蘇生したとは記されるものの、これほどの修法を以てしても、伐採の手を下した者に対して霊木は祟ったということになる。

『溪嵐拾葉集』巻第七の六「根本中堂不思議事」（註33参照）において、「無量密迹金剛力士、此霊木ヲ劫初自リ守護シテ、山家大師我山建立ノ時分ヲ待給ヘリ」と記される比叡山根本中堂の薬師像の御衣木は、「大師手ツカラ此ノ霊木ヲ切給時、自ラ東方へ倒ル」ことが、七不思議の第三に挙げられている。この不思議も、故に「自倒ノ霊木」と名づけられたことも、放光する霊木が抵抗せず、最澄の意に従って自ら進んで倒れたことを、奇瑞として称えたものではなかったか。

このような生木の霊木を切り倒すことへの恐怖に比べれば、白蓮華谷に倒木となっていた長谷寺の御衣木が、洪水に乗って流出してくることや、吉野比蘇寺の放光木が流木として漂着することは、それだけでも従順であり、奇跡ということになる。

七 造像と祟り

しかし流れ出た霊木にもまた、漂着した土地で災厄が起こるといふ祟りの物語がある。長谷寺の御衣木は『三宝絵』には、

近江国高嶋郡ノミラガ崎ニヨレリ。サトノ人ソノハシヲ切トレリ。スナハチソノ家ヤケヌ。又ソノ家ヨリハジメテ、村里ニシヌル者オホカリ。家々崇ヲウラナハスルニ、コノ木ノナス所ナリトイヘリ。コレニヨリテ、アリトシアル人近付ヨラズ。

とある。漂着しては災いを起こすことは、冒頭に長谷寺縁起を流用した志度寺の御衣木縁起にも見え、

是ニ於崇峻天皇ノ御宇、湖水自リ宇治河ニ流レ出テ、山城ノ国淀ノ津ニ流レ留マル、而三箇月ノ間之在リ、瑞光ヲ放ツテ赫奕タリ、見聞ノ人、奇異ノ思ヒ成シ、敢ヘテ以テ手ヲ懸ケズ、謹慎デ之ヲ仰崇

スル処ニ、淀ノ津ヨリ海中ニ流レ出テ、波上ニ漂濤令ムルコト数十年ナリ、然ルニ流レ寄ル所々ニ於ヒテ、或ヒハ光ヲ放ツテ、或ヒハ凶ヲ致スノ間、皆人恐怖ノ思ヒヲ成シテ、之ヲ突流シ畢ヌ、仍テ歳月ヲ曆ルノ後、讃岐国志度浦ノ磯辺ニ流寄ル、(読み下しは山本)とあり、ともに漂着する浦々で放光や災いを起こしては、脅えた浦人たちに突き放されるという型の説話となっている。

さらに霊木は、このことを聞いて十一面観音造立の願を立てた出雲大水により、その御衣木として大和の当麻里に引かれて来たものの、仏像を造らないうちに大水は死に、木は八十年放置され、当麻里でも疫病が流行り「コノ木ノスルナリ」と言われ、郡里の人々により初瀬川の中に引き捨てられる。祟りは霊木が仏像の御衣木に選ばれた時点で終わるわけではない。

御衣木が漂流して祟る説話は『長谷寺靈験記』の影響を受けた『総持寺縁起』⁽³⁸⁾にもある。これは、宋から日本の藤原高房に御衣木を送ろうとして果たせなかった大神御井が、経緯を彫り付けて霊木を海に流したところ、日本に漂着して浦人たちに災いをなし、それを聞き付けた高房の息子によって貰い受けられ仏像となされるものである。

仏像の御衣木に充てられたまま放置された霊木が人に害をなす話は、『長谷寺縁起』とは全く異なる内容の『観興寺縁起』⁽³⁹⁾にも見える。この縁起絵は鎌倉末期とされるので、縁起の内容はそれ以前に溯ることになる。草野太郎常門が狩りをして豊後国日田郡石井里の長者の館に至ると、長者の末娘のみが居る。かつては千人の眷属がいたが鬼に夜ごとに一人ずつ取られ、残った娘も今夜限りの命という。そこで常門が待ち構えていると、目は日月をかけたような悪鬼が現れたので矢を放ち、血の後を追って行くと山頂に切り倒された柏の木があり、矢が立っている。

娘の話では、長者が山頂の柏で千手観音の像を刻めという夢の告げを聞き、切り倒したものの、仏像に彫れないまま放置していた柏だという。常門はこの霊木に矢を射たことを謝り、寺を建てて安置するので筑後国へ来るように招く。霊木は嵐に乗って流れ出て、矢を立てたまま神代の渡しに漂着して光を放つ。常門の家へと招くと、その夜の内に流れ寄ったという。仏像が矢で射られた話なら、立山や伯耆大山の縁起にもある⁽⁴⁰⁾。狩りをする佐伯有頼や玉造俊方を諫める方便として、阿弥陀が熊に、或いは地藏が鹿に化したというものである。ところが観興寺縁起で放置された御衣木は、人の命を取る悪鬼そのものと化している。

それでも御衣木の段階で祟る説話の限りでは「仏像になりたいとの願いが叶えられず他の目的に用いられたり放置されたため」と解釈することもできよう。『日本靈異記』の「未作畢仏像而棄木示異靈表縁 第廿六」⁽⁴¹⁾のように、造りかけの御衣木が橋の用材に使われ、声を上げるという怪異を以て禅師にその存在を訴え、仏像に仕上げさせた類話もあり、これらの縁起で仏像造立を志した出雲大水や、藤原高房、観興寺縁起の長者本人は、祟りを受けたと書かれていないからである。

ところが『長谷寺縁起文』では、大水のかわりに大和国高市郡八木里の小井門子という女性が、仏像を造ろうとしてこの木を引いて来たものの「依木崇門子死去」と書かれている。造像を志して御衣木に関わったにもかかわらず、祟りで死んだのである。「仏像になることを欲して祟る霊木」という見方ではこの話を説明することはできない。

そこで寺川真知夫は「祭祀の方法を誤れば祟りが続くとする崇神紀などの固有信仰の伝承を踏まえたものなのであろうか」という。たしかに霊木を仏像に仕上げることで自体が、祟り鎮めの祭祀である。槻峯寺縁起で斧の加持が十七日間行われたように、伐採から始まって、一刀三拝と

いう文言に象徴される造仏のための煩瑣なまでの修法、或いは途中で放置することなく仏像に仕上げることも含め呪術的要素が濃い。呪法の手順を間違えれば逆効果となることはあり得る。しかし縁起には、門子が修法を誤ったとも造像を放棄したとも書かれてはいない。

理由はより根本的なところに見いだせるのではないか。もともと霊木は、自ら望んで託宣し仏教に帰依したという多度神とは違い、必ずしも仏像となることを喜ぶとは限らない立場である。木の意向の如何にかかわらず、刃を入れられて仏の姿にされる、すなわち崇りを鎮めるために人間の都合で無理矢理成仏させられてしまうわけである。神木がそれを不本意として、再び抵抗し崇りをなした、と考えられたとしても不自然ではない。

霊木での造仏とは、崇る木を仏となして祀り鎮めてしまうことに他ならない。『長谷寺縁起』の門子の死は、それが倒れた後もなお、抵抗の意志を持ち、崇り続けたものと解釈できるのではないか。

八 崇り鎮めと造形

成仏することを拒んだ霊木の抵抗が、御衣木の崇りということになる。霊木を伐る時と同様、崇る御衣木に鑿を入れることは、願主や仏師にとって、命懸けの対決である。『日本霊異記』や『今昔物語』などの説話にしばしば登場する、途中で放棄された御衣木（註41参照）とは、或いは加持の力が足りずに一層崇りが激しくなったとして、造像が中断されたものであったかも知れない。

ならば霊木の造仏とは、どのようにされるべきか。『三宝絵』の長谷寺の縁起で、沙弥徳道は崇りを起こして長谷河の中に引捨てられ三十年

放置された御衣木のことを聞き「此木カナラズシルシアラム。十一面観音ニツクリタテマツラム」と思ったものの、

徳道力無クシテ、トクツクリガタシ。カナシビナゲキテ。七八年ガ間、此木ニ向テ、「礼拝威力 自然造仏」トイヒテ額ヲツク。

という。崇る木に向かい、自然に仏像ができることを祈ったのである。そこに飯高の天皇が「ハカラザルニ恩ヲタレ」、房前の大匠「自ラカラクハフ」ことにより、ついに御衣木は十一面観音像となる。崇り鎮めとしての対決ではなく、礼拝によって霊木は自ら仏像となったのである。

後世の『長谷寺縁起文』ではより直接的な「自然造仏」、すなわち地藏と不空羅索観音が、稽主勲と稽文会の二仏師に化身して観音像を彫ったとする⁽⁴²⁾。観音が仏師と化して観音像を彫る類例は、『長谷寺縁起』の影響の下に書かれた『志度寺縁起』や『総持寺縁起』の他に、別系統の由来を語る『粉河寺縁起』にも見いだすことができる（註38瀧尾論文参照）。

それでは霊木が「自然」に「造仏」するのでなければ、御衣木はいかにして仏像に造られるのか。『溪嵐拾葉集』の比叡山根本中堂の最澄自刻とされる薬師像（註33参照）は、「大師一ヒ斧ヲ下テ三敬禮シ玉フ。本尊ハ又一ヒ低頭シ玉フ。」と、一斧ごとに丁重に拝され、御衣木もその都度返答しつつ彫られているのである。

霊木を拝し、念を押しながら彫る。しかし御衣木がそれ以上彫ることを拒絶した場合はどうするのか、そのような状況をよく示すのが先の『観興寺縁起』（註39参照）である。千手観音としての造像途中で放置され悪鬼と化した柏樹は、草野太郎常門が招くと家まで流れ寄った。「常門が試みに斧で削ると血が滴ったので、もったいないことだといって、斧を用いずそのまま千手観音と崇めて、一字の伽藍を建て、普光院と名

づけてそれを安置した。」という。未完成であっても霊木が拒否すれば、それ以上は刃を入れずにそのまま仏として祀るのである。目的は仏像に仕上げることでなく、霊木の祟りを封じること、もしくははその力を正の方向に転化させることが目的なので、仏像の完成度は問われない。同様に霊木の造像を途中で止める例は、慈覚大師円仁が苗鹿明神より贈られた柏樹の霊木の片割れ⁽⁴³⁾で作られたという『真如堂縁起』の本尊造立説話にも見える。

さて以前貽し置かれし片木にて、弥陀立像一刀三札に彫刻して、彼の船中出現の化仏を腹身し給ふ。当堂の本尊是れ也。然るに、眉間の白毫、余仏に交はりたる本尊なり。是れ則ち、白毫相いまだ分廻しばかりして、玉を入れ給はで、大師申し給ふ。(中略)「聚落に下り給ひて、一切衆生を引接し給ふべき。中にも罪深き女人たちを救ひ給ふべし。」と申させ給へば、三度うなづき坐ます。有難しとも言辭に述べ難き事なり。既に生身の尊体にて坐すれば、重ねて刀を立つべきやうなしと恐怖を懐きて、白毫の玉を入れ給はざるなりと。「一刀三札」しながら木の像に仏が宿り「生身の尊体」となった時点で、「刀を立つべきやうなし」と恐れて、彫刻としては中途であってもそのまま本尊として祀ったのである。

仏像を美術作品として見、その技術的な完成度を評価する現代から見れば、御衣木に尋ねながら彫る、それ以上刃を入れることを恐れ、未完成のまま鑿を置くという行為は荒唐無稽に聞こえるかもしれない。しかし、そのような姿の仏像は現実存在する。井上正が「霊木化現仏」として挙げたような、仏像には不適な材を用いた、立木仏や鉞彫像のように未完成、或いは稚拙に見える一木造りの素木の像が、それである。

結 なぜ霊木が仏像の御衣木に使われたのか

一木造りの素木の仏像のうちに、神木が御衣木に用いられたと思しき作例が存在することについて、本論では、古来の樹木信仰に基づくと思われるにもかかわらず、何故、霊木に斧を入れて伐採し、鑿で削ることが、それも異教である仏の像を造るために許容されたのか、という観点から、霊像縁起の御衣木の由来を検証した。

御衣木縁起においては、すでにその祟りが指摘されている長谷寺と志度寺や剛林寺以外にも、異常な巨木や放光する木の伝承が少なくないように、怪異を為すとして恐れられる悪性とされる霊木が御衣木のうちに含まれている可能性を指摘した。さらにそのような木を御衣木として仏像を造ることが、樹木の精を仏の姿に仕立て、成仏させてしまうという祟り鎮めの意味を持つと考えた⁽⁴⁴⁾。

その上で、このような木を用いた造像の目的が、仏像としての観賞性ではなく、霊木の祟り鎮めとなるゆえに、稚拙、或いは未完成に見える仕上がりであった可能性を指摘した。このような仏像が造られた動機については、樹木信仰と仏教による祟り鎮めという視点から、あらためて考える価値があるのではないだろうか。

註

- (1) 法起寺蔵十一面觀音像、東寺八幡宮三神像など。
- (2) 松尾神社男神像、万福寺蔵觀音菩薩像、大寺薬師蔵四天王像など。
- (3) 薬王寺蔵千手觀音像、小波多神社蔵神像など。
- (4) 岡直己「結論」、第一編第五章「薬師菩薩神社の神体考」『神像彫刻の研究』角川書店 昭和四十一年

- (5) もっとも現在祀られている檀仏薬師像も、より古いと考えられる像も、薬師像という呼称に反して如来形ではなく天部形であり、仏像的な形状を取る神の権現像と解釈される。
- (6) 井上正 第五章第三節「靈木化現の仏と神」『図説 日本の仏教』六 神仏習合と修験 平成元年、「靈木化現仏への道」『芸術新潮』四二—一 号 平成三年、九「檀仏と靈木化現仏」『岩波日本美術の流れ』二「七—九世紀の美術」平成三年
- (7) 長坂一郎「神仏習合十神仏習合史についての研究史」『神仏習合像の研究』中央公論美術出版 平成十六年
- (8) 例えば、金子啓明「木の文化と一木彫」特別展図録『仏像—一木にこめられた祈り—』東京国立博物館編 平成十八年など。
- (9) 寺川眞知夫「御衣木の祟り—長谷寺縁起—」『仏教文学とその周辺』和泉書院 平成十年
- (10) 『日本書紀』斉明紀七年条
- (11) 「大安寺縁起并流記資料帳」『寧楽遺文』下
- (12) 『続日本紀』宝龜三年四月己卯条
- (13) 『類聚国史』第三十四卷淳和天皇不豫条
- (14) 瀬田勝哉「春日山の木が枯れる」『木の語る中世』朝日新聞社 平成十二年
- (15) 高橋千恵「応安の神木在洛をめぐる人々—南都と京都の接点—」『神道宗教』一六六号 平成九年
- (16) 達日出典「泊瀬の上の山寺」考『長谷寺史の研究』巖南書院 昭和五十四年
- (17) 『三宝絵』下 二十「長谷菩薩戒」
- (18) 奥健夫「木彫像の成立」『日本美術館』小学館 平成九年
- (19) 谷原博信「志度寺縁起—御衣木縁起と漂着神について—」『四国民俗』三十一号 平成十年
- (20) 達日出典「讃岐志度寺縁起と長谷寺縁起」『日本仏教史学』第二十五号 平成三年
- (21) 「諸寺略記」剛林寺『阿婆縛抄』巻第二百
- (22) 『今昔物語』巻三十一 本朝付靈鬼「近江国栗本郡大柞語第三十七」
- (23) 『今昔物語』巻二十七 本朝付靈鬼「狐変大柞木被射殺語第三十七」
- (24) 濱中修「伊吹童子」致「叡山開創譚と地主神—」『室町物語論攷』新典社 平成八年
- (25) 「諸寺略記」善峯寺『阿婆縛抄』巻第二百
- (26) 『日本書紀』欽明天皇十四年条
- (27) 例えば『弘法大師行状絵詞』巻五「清涼宗論」
- (28) 『今昔物語』巻第二十七 本朝付靈鬼「西京人見応天門上光物語第三十三」
- (29) 『今昔物語』巻第二十七 本朝付靈鬼「有光来死人傍野猪被殺語第三十五」
- (30) 『中右記』嘉保二年（一〇九五）十月二日条（小学館版『日本古典文学全集』「今昔物語」四巻の「西京人見応天門上光物語第三十三」解説が指摘）
- (31) ちなみに夜光る物を怪とする見方は古代中世に限らない。鳥山石燕の『画図百鬼夜行』で、光物は「狐火」「叢原火（宗源火）」「釣瓶火」「ふらり火」「姥が火」と五十一の怪異現象のうち一割を占める。同じく『今昔画図続百鬼』五十四項のうちにも「不知火」「古戦場火」「青鷲火」「提灯火」「墓の火」が含まれ、仏教とその説話が民間に浸透し切った江戸時代もなお、光物が怪奇現象の中で大きな割合を占め続けていることがわかる。
- (32) 『尾張国笠寺縁起』（『続群書類従』巻第八百四）
- (33) 『深嵐拾葉集』第七七一六「根本中堂不思議事」（『大正新修大藏経』第七十六巻）
- (34) 千手観音像の由来を解く『久能寺縁起』にも、光る物を射た伝承がある。「海岸近くの峯に幾年とも知れざる杉一本有り。梢雲に聳え枝四方に拡がる。中に輝く者あり、朝日の出づるがごとし。臣下これを見て久能に告ぐ。久能ここに視て「深山定めて変化の者あらん。よく射れば、射取るべし。仰ぎて弓を強い、射れば即ち落つ。見るに变化の者はなく、閻浮檀金の五寸余の千手観音おわします。」ここでは光を变化の物と思って射たところが観音像を発見したという。仏像も縁起の中では怪奇現象を以て出現しているのである。
- (35) 『多度神宮寺伽藍縁起資料帳』（『平安遺文』巻一）
- (36) 『今昔物語』巻第十一 本朝付仏法「推古天皇造本元興寺語第二十二」
- (37) 檜崎宗重「槻峰寺建立修行縁起」『國華』七八三号 昭和三十二年、高岸輝編「槻峰寺建立修行縁起絵巻・大覚寺縁起絵巻」月峯山大覚寺 平成十七年
- (38) 瀧尾真美子「総持寺縁起絵巻」『日本美術工芸』五一—一 号 昭和五十六年、日冲敦子「茨木市補陀洛山常称寺蔵「総持寺縁起絵巻」』『人間文化研究』四号 平成十八年
- (39) 高崎富士彦「観興寺縁起図」『MUSEUM』一七八号 昭和四十一年の要約による。久留米市立草野歴史資料館編「観興寺宝物展図録」（昭和六十二年）には縁起文の図版があるというが、絶版とされている。現在、本縁起図を含む内容の調査が行われていると仄聞するのでその成果公開を待ちたい。
- (40) 「立山—伯耆大山」『国文学解釈と観賞』「寺社縁起の世界」六〇—一 号 昭和五十七年
- (41) 『日本国現報善悪霊異記』中巻「未作畢仏像而葉木示異靈表縁 第廿六」
- (42) 宮次男「長谷寺縁起」上下『美術研究』第二七五・二七六号

(43) 小松茂美編『続々日本絵巻大成』伝記・縁起編 五 中央公論社 平成六年に拠る。

苗鹿明神が贈った柏樹は「此木の本を切るに、毎夜光明を放つの間、大師恠しみ給ひて、打ち割りて見給うに、一片は座像の仏体、一片は立像の尊形、木の目に鮮やかに見ゆ。此の霊木を以て先づ弥陀座像一体〔蓮華部印〕造立し給ひて、大師隨身奉持し給ひしが、後には日吉社念仏堂の本尊となり給う。今一本の木、立像の形あるをば、憶念し給う事ありて、其の時は造立し給はざりしなり。」とある。

(44) これは仏像と御衣木縁起の問題に限らない。怪をなす植物が成仏する物語として、遊行柳や芭蕉、藤など、草木の精を主人公とする一連の謡曲がある。いずれも僧侶の前に人間の姿に化現した草木の精霊が、僧侶に問答や読経を乞い、その結果「草木国土悉皆成仏」の偈頌を以て成仏し、仏法を普め称える。これらもまた、日本における神仏習合の物語として同質のものであると考えられる。